復活節集会

永遠の生命を生きる（二）――キリストの「復活の生命」――

――復活節に賜わる神・キリストからの贈物――

２０２３年４月９日（京都ＫＫＲくに荘）
奥田 昌道

開会のことばと讃美　十字架の苦しみ　隠れていた本当の生命が現れて来るイメージ　十字架と復活　信仰とはプレゼント　私たちの使命と喜び　キリストの生命を分かち与えていく使命　私たちの国籍は天にある　ゲッセマネの祈り　十字架上での祈り　甦り給いし主キリスト　むすび
奨励のことば　祈り

●開会のことばと讃美

皆さん、おはようございます。それでは、本日の復活節の集会を、ただいまから始めたいと思います。初めに、讃美歌148番「救いの主はハレルヤ」を歌いましょう。

1　すくいのぬしは　ハレルヤ
よみがえりたもう　ハレルヤ
かちどきあげて　ハレルヤ
み名をたたえよ　ハレルヤ

2　十字架をしのび　ハレルヤ
死にて死にかち　ハレルヤ
生きていのちを　ハレルヤ
ひとにぞたまう　ハレルヤ

3　主の死によりて　ハレルヤ
すくいはなりぬ　ハレルヤ
あまつつかいと　ハレルヤ
ともにぞうたわん　ハレルヤ

はい、ありがとうございました。復活節の集会に皆さんよくお集まりくださいまして、ありがとうございます。本日の講筵題目は、皆さんにお配りしてありますとおり、

『「永遠の生命」（キリストの「復活の生命」）を生きる』

です。そして、副題といたしまして

――復活節に賜わる神・キリストからの贈物――

と題しました。聖句として掲げましたのは、ヨハネ伝の11章25節から26節の聖言（みことば）、

「我は復活（よみがえり）なり生命（いのち）なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。凡（およ）そ生きて我を信ずる者は、永遠（とこしえ）に死なざるべし。汝これを信ずるか」（ヨハネ11・25～26）

を掲げました。講筵内容の要旨として、まず一番目は、

Ⅰ受難日の出来事

（1）ゲッセマネの祈り。マルコ伝14章32～42節、ルカ伝22章39～46節

（2）十字架上での祈り。マタイ伝27章45～50節、マルコ伝15章33～37節、ルカ伝23章33～46節。

これを順序を追ってご一緒に拝読したいと思います。それから、二番目には、

Ⅱ甦り給いし主キリスト

（1）マタイ伝28章

（2）マルコ伝16章

（3）ルカ伝24章　エマオ途上のキリスト

（4）ヨハネ伝20章「マリヤよ」「ラボニ」

「平安なんじらに在れ」、「聖霊を受けよ」、「見ずして信ずる者は幸福なり」

マタイ伝、マルコ伝、ルカ伝、ヨハネ伝の福音書からここに引用しております。

そして、三つ目として、これは最も大事なことだと私は思っていますが、

Ⅲ我らの中に今も生きて在り給う御霊のキリスト

です。これが最も本当に大事です。「過去がどうであった、こうであった」というのではなく、

「今、現在、皆さんお一人お一人が、本当に復活されたキリストとご一緒に日々を過ごしておられるか」

それが大事なんです。「過去がどうであった」という追憶の中に我々は生きているのではありません。今、現在、このキリストは生きて在り給う。しかも、皆さんの中にいらっしゃる。担っていらっしゃる。そして、引っ張って行ってくださっている。

「我、主と共に十字架せられたり、最早（もはや）、我、生くるにあらず、復活された御霊（みたま）のキリストが我を導いて生きて在り給う」

と。そういう、今、現在、復活されたキリストと一緒に日々を歩んでいる。瞬間、瞬間に主は共に居てくださる。その現実の中に生きているということ、それが本当に大事なことなのです。そのことをどうぞ、ご自覚くださいますように。

しかも、それは我々の側に何か拠り所があるのではない。

「自分たちは信仰が厚いから、自分たちは祈りが深いから」

とか、そういうこちらの側の状態如何に関わらない。神・キリストの側で最初からご用意くださって、

「さあ、これを受けとれ。これを受けとって永遠の生命の中に生きよ」

と、そう言って迫ってくださる。それに圧倒されて生きていくという生き方。そして、周りの人々にこの生命を分かち与えて行くという在り方。これが、本当の意味で復活節を迎えるという、甦り給うたキリストと一緒に生きて行く我々の日々であります。理屈じゃない。

現実なんです。それを皆さんお一人お一人が本当に日々生きて、

「我を見た者はキリストを見たのである。私にぶつかった人はキリストさまにぶつかったのである」

と、そういうお気持ちで日々を歩んでいただきたい。これが、この復活節を迎えるにあたって、私は皆さまに心からお願いしたいことなのです。

私自身も、もう90という歳を迎えてしまいました。人生100年時代と言いましても、仮に100年としましても、もう9割まで来たんですから。90というのは、「卒」と書きますね。人生卒業かなと思うようなことですけれども。

「外なる人は壊(やぶ)れども内なる人は日々に新(あらた)なり」（コリント後４・16）

と、コリント後書4章のおしまいのところにあります。

これはもう、私も皆さんも含め、歳を重ねるごとに外なる人は壊れて行きます。

「あちらが痛い、こちらが痛い。昔はこんなことが出来たのに今は出来ない」

と、そういう外側を考えれば、嘆かわしいことばかりが出てまいります。若々しくなる、瑞々(みずみず)しくなるということは、望むことはできないでしょう。けれども、私たちは、

「外なる人は壊(やぶ)れども内なる人は日ごとに新(あらた)なり」

という、あの聖言のように、外なる人は衰えて行きましても、それと逆比例的に、内なる、御霊を賜った生命、これは活き活きと生き輝き、そして周りの人々に生命を分かち与えて行くという生きかた。これが、神・キリストの側で私たちに望んでいらっしゃることだし、それはキリストさまが、

「責任持ってやるからね、任せておけ！」

と、まぁ、そういう感じであります。

何か、「信仰」というと、皆さん難しくお考えかもしれません。でも、そうじゃないんです。私たちは、生まれたときから太陽は輝いてくれていた、生まれた時から空気はもう我々を包んでくれていた。すべては備えられていたんですね。その中に、私たちは生命を賜りました。肉体の生命をそうやって頂いて、そして、時満ちて、今度は本当の内的な生命、

「外なる人は壊(やぶ)れども内なる人は日ごとに新(あらた)なり」

と言わしめる本当の内的な霊の生命というものを頂きました。すべて、恵みなんです。

「こちらの側に何か良いところがあるから」

ということではないんです。もう圧倒的、絶対的な神・キリストの側での、ご用意くださったプレゼントなんです。我々はそれを、

「ありがとうございます」

と言ってお受けするだけです。親御さんになられた方は、子どもさんに対して与える一方でしょ。子どもさんが成長すると、今度は自分たちが担われて行きますが、しかしながら、本来、人というのは恵みをいただいて、生命をいただいて育まれて生きてまいりました。

そういう存在だと私は思っている。そして、我々の全存在を担い支え、日々にいのちづけてくださっているのが主イエス・キリストさまです。先ほどの讃美歌148番の、

「すくいのぬしはハレルヤ、よみがえりたもうハレルヤ、かちどきあげてハレルヤ、
　み名をたたえよハレルヤ。十字架をしのび、死にて死にかち、生きていのちを人
　にぞたまう」

と。これはすばらしいですね。そして、

「主の死によりて、すくいはなりぬ」

と、我々のマイナスを全部、主キリストさまが背負ってくださった。我々が立派だからとか、信仰が厚いからとか、何かこちらの側に拠り所があって私たちは救われているのではありません。すべては主が担って、片づけてくださった。

●十字架の苦しみ

本来ならば、主キリストは祈っておられたら、眩い姿になって、そのまま天に昇って行く、そういうお方です。あの山上の変貌の場面がありますね。弟子たちを連れて山で祈っておられると、眩い姿に変貌され、天が開け、そこにモーゼとエリヤが現れた。そして、主イエスがどのような死に方、つまり人々の罪を背負って十字架に懸かられる、そのようなことについて話し合っていたという場面が出てきます。弟子たちは、ペテロもヨハネも皆驚いて、まさに気を失いそうな状況だったということがありました。

私はイエス・キリストさまということを思うときに、このお方は本当に祈っておられたらそのまま眩い姿になって天に昇って行くお方だと思っている。そのお方が、我々のマイナス・罪・咎・言い逆らい・反逆――神よりも自分を何よりも大事にする。自分を生かしてくれるから、自分に幸いをもたらしてくれるから、神さまを信じる。まるで神さまを自分の召使のように思っているのが人間なんです――そういうエゴイスティックな人間をそのままお赦しくださって、人間のエゴをキリストは全部背負ってくださって、そして十字架の上に砕かれ、ご復活の生命を我々に無条件に賜うという主イエス・キリストさま。

さきほど申しましたように、祈っておられますと眩い姿になってそのまま天界に帰って行かれて然るべき当然なお方が、あのような十字架の苦しみを味わってくださった。

「わが神、わが神、なんぞ我を捨て給いし」

と。いままで神さまといつも一つであった。それが引き裂かれて、地獄へ蹴落とされる。

「わが神、わが神、なんぞ我を捨て給いし。そんなことがあっていいんですか。あなたとはいつも一つじゃなかったのですか。あなたに逆らったことがあったんですか。あなたは私のすべてであった。そのように生きてきた私が何故、今引き裂かれて、蹴落とされて、地獄へと落ちて行かねばならないのですか。そんなことがあっていいんですか！」

そういうプロテストですよね。

「義を貫いたその義人イエスが地獄へ突き落とされる。そんなことがあっていいんですか。それがあなたの義なんですか」

と、そういった叫び。それを通して、我々は無条件に赦され、救われたわけです。どんな我々の背きも、マイナスも、すべてをキリストが背負ってくださった。我々が本来受けるべき地獄という運命をキリストはひっくり返して、永遠の生命をくださった。そのことを、本当に我々はひれ伏して感謝して、

「ありがとうございます」

とお受けするだけだと、私は思っております。

昔、あのようにして十字架を負い、葬られ、そして三日目に甦って父の御許にお帰りになった。そしてその後、代々に現在に至るまで、御姿は見えないけれども、聖霊の姿で御霊のキリストとして、今も我々の中に生きていてくださっている、生かしてくださっている。本当にすべて神さまの側で用意してくださった、そういう救いの厳かな事態。それを私たちは、ありがとうございますと感謝して、ひれ伏して、それをお受けいたしますということのほかに無いと私は思っております。

歴史的には、福音書に書かれているように、死を蹴破って、復活のあの素晴らしい栄光の御姿となって現れてくださったお方が、今もなお私たちの中に聖霊というお姿で宿ってくださっている、包んでくださっている、担ってくださっている。そのことを、どうぞ皆さま、昔の出来事じゃない――確かに二千年前の歴史的な出来事でしたけれども――御霊の姿で今も我々のそば近く居てくださる。我々を包んでくださっている。我々を担ってくださっている。そして、

「我生くれば汝らも生くべし」

と、そのように弟子たちにおっしゃった。その御言どおりに、私たち一人一人を担いあげてくださっている。そういう、神・キリストの側でご用意くださった厳かな救いの事態を本当に感謝してお受けしたいと思っております。

私が本日皆さまに訴えたいのはこの聖句です。

「25……**我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。26凡そ生きて我を信ずる者は、永遠に死なざるべし。汝これを信ずるか**」（ヨハネ11・25～26）

このようにして、皆さんお一人お一人に神さまの側でお尋ねくださっている。それに対して私たちの側では、

「はい、ありがとうございます。本当にありがたくこれをお受けいたします」

そう言って、皆さん、全存在でお答えする。そういう在り方で居ていただきたいと思っています。

ですから、この私のプリントの要旨というところの三番目です。

Ⅲ　我らの中に今も生きて在り給う御霊のキリスト

これが最も大事なことです。「過去にどうであった、こうであった」という、そういう追憶の中に我々は復活節を迎えているのではありません。今、現にキリストが生きて、皆様お一人お一人の中に生きてくださっている。そのお方を本当に感謝してお受けして、

「我、主と共に十字架せられたり。最早（もはや）、旧き我、生くるにあらず、ご復活のキリスト、御霊（みたま）の姿で今も生きて在り給うこのキリスト」

このお方と私たちは御名を讃えて、共に生きて行くという在り方でありたいと私は願っています。ですから、この要旨の三つ目の、

「私たちの中に今も生きて在り給う御霊のキリスト」

これをしっかりと、我々は全存在的に受けとり、それを告白して行く、これが大事なことだと思っています。

●隠れていた本当の生命が現れて来るイメージ

「人は心に信じて義とせられ、口に告白して救われる」（ロマ10・10）

ということが、ロマ書の10章あたりに出てきていたと思う。心に信じて義とせられ、口に告白して救われる。我々は、単に心の中で思っているだけではだめです。はっきりと行動に生きる生き方において、それを告白していくということが大事です。

人は皆、私も含めて、歳を取れば必ず、外なる人は壊れて行きます。けれども、

「外なる人は壊（やぶ）るれども内なる人は日々に新（あらた）なり」

と、これを私たちが全生活で現して行く、告白して行く、これが大事なことです。私たちのそのような生き方によって、周りの人たちは、

「ああ、やっぱりキリストを信じている人の生き方というのは凄いなぁ」

と感ずる。外なる人は本当に衰えて、

「前はあんなことができたのに今はできない。こんなことができたのにできない」

と、そういう嘆き節があたりまえなんですよね、歳を取るということは。ところが、そういう外なる人間は嘆き節の積み重ねかもしれないけれども、それを突破して、なお輝いて御名を讃えている、そして、弱っている人を元気づけていく、そういう在り方。これが私たちに賜（たまわ）っている在り方だと、私は思っている。

それは賜るものですから、こちらで作り出すものではありません。

ですから、先ほど讃美しました148番、

1節「すくいのぬしはハレルヤ、よみがえりたもうハレルヤ、かちどきあげてハレルヤ、み名をたたえよハレルヤ」

2節「十字架をしのび、死にて死にかち、生きていのちを、人にぞたまう」

これがいいですね。我々は死んで終わりじゃない。死を突破して、そして本当の生命を生きて行くという生き方、これを主は我々に賜りました。死を突破して生きて行くという、永遠の生命というのはそういうことでしょ。確かに、外なる人は衰えて行きます。誰でもそうです。だけども、それとは逆に、内なる人はいよいよ輝いて行く、私はそういうイメージでいるんです。ちょうどこの外なる人、体(からだ)が衰えて駄目になった――それは肉体的な死です――そうしたら、それまで隠れていた本当の生命が栄光の姿で輝きをもって現れて来るというイメージを私は頂いています。

それは、人には見えないかもしれない。私たちは今、見える世界に生きていますよね。皆さんも、見える世界、手で触れる世界、五感で感覚できる世界にいる。ところが、そういう世界の奥に隠されているもう一つの世界があります。霊なる世界です。外なる世界が終わったときに、それまで隠されていた、見えなかった本当の生命の世界が忽然と現れて、それが天に迎えられて行く。そこでイエス・キリストさまにお会いし、先に天に召されて行った者たちが待っていてくれる。そういう方々とお会いして凱歌をあげる。これが私のイメージなんです。歳を取って肉体的には衰えていきます。でも、それを突き破って、隠されている本当の生命がやがて現れる、その時は本当に凱歌をあげるんだという、そういう思いで私は生きています。皆さんはいかがですか？

これは思われたる世界ではない。リアリティなんです。リアリティだけれど見えないんですね、残念ながら。我々は今、見える世界に生きています、この現象界に。でも、そういう見える世界とは別にもう一つの次元の異なる世界がある。実はそこに神さまがいらっしゃって、キリストさまもそこにおられた。ところが、あのクリスマスの時にその別次元の天界から、この我々の物質の見える現象界へと来てくださったのが降誕節ということでした。キリストが語られたことは本来、天界の事態を語られたと思う。

「天においてはこうだよ、神の次元ではこうだよ」

と。それを現実化してくださっている。それが、イエス・キリストの御業(みわざ)だったと思っております。私たちは、その見える世界でやってきました。けれども、

「見える世界の私たちの生命が尽き果てた後には、見えないもう一つの世界が忽然と現れて来る。その中に受け入れられて、そこで生き続ける。」

これが私がいただいているイメージなんです。

そのもう一つの世界、そこには先に召されて行った者たちが輝いて私たちを待ってくれている。だから、そこでお会いできる。向こうからはこちらが全部見えているんですよ、向こうの世界からは。ところが、こちらからは見えないんですね。だから、向こうの世界と今我々がこうやって生きている現象界、言い換えれば、私たちが生きているのは現象の世界、見える世界、これは有限です。必ず終わりがあります、地球も含めてね。でも、もうひとつの世界、そこは永遠界です、根源界です。そこへ私たちは羽ばたいて行く。

今、皆さんも地上で生きていらっしゃる。その時に、

「地上の体は駄目になって滅びた後に、それまで隠されていた、隠れていた永遠の霊なる生命が忽然と輝きを発揮して、そして永遠界へと迎えられて行く。そういうことがリアリティだ、思われたる世界じゃない、本当だ」

と。それをキリストさまは実証してくださった。キリストは、ご自身のご復活という事態を通して、

「そういう世界が本当だよ」

と、そうやって我々をお迎えくださる。そのように私は思っています。皆さんはいかがですか？

「地上の生命、それですべて終わりだ」

なんて、だれも思っていらっしゃらないでしょう。それが終わった後には、それまで隠されていた本物の根源世界、永遠界、それが皆さんを迎え入れて、そして、そこで御名を讃えていく。そこへのいわば橋渡しをしてくださったのがイエス・キリストさまだと、私は思っている。

「我は道なり、真理(まこと)なり、生命(いのち)なり、我に由らでは誰にても父の御許(みもと)にいたる者なし」（ヨハネ14・6）

とキリストはおっしゃった。「道」というのは、踏みしめて歩いて行く。我々、皆さんも含め一人一人がしっかり自分の足で踏みしめて歩いて行く、その道が生命への道である。本当の世界への道である。

「我は道なり、真理なり、生命なり。この私という道を踏みしめて行けば、必ず、永遠界、そこで輝き生き続ける、そういう本当の世界が待っているよ」

と。この地上の世界、見える世界、現象界と、もう一つ別次元の根源界、永遠界がつながっているんです。私たちはこの見える世界、現象界で精一杯、御意(みこころ)を求め、御意に従って、御力(みちから)に助けられて、主キリストと一緒に歩んで行きますならば、その旅路が終わった向こうには、永遠界が私たちを待ってくれている。永遠界で私たちを見守って励まし続けてくれていた、そういう先に召された人たちと、そこでお会いして御名を讃える、そういう世界。本当に明るい光の生命の世界。それをイエス・キリストさまは、ご復活という事態を通して我々に明らかにしてくださった。私はそのように受けとっています。

●十字架と復活

だから、先ほどの讃美歌148番の、

1節「すくいのぬしはハレルヤ、よみがえりたもうハレルヤ、かちどきあげてハレルヤ、み名をたたえよハレルヤ」

2節「十字架をしのび、死にて死にかち、生きていのちを、人にぞたまう」

と。今度は私たちもキリストさまをいただいていますと、そういう存在として、人々に生命を分かち与える。そのような存在として用いられていきます。我々が地上でなすべき役割というのはそれなんです。我々は、

「キリストに生命をいただいた、ああよかった」

と、それですぐに天界に迎え入れられるんじゃなくて、地上で生命を持たない方々――我々も過去は全部そうだった――そういう人々に生命を分かち与える、そういう使命を授かっております。それがこの、

２節「十字架をしのび、死にて死にかち、生きていのちを、人にぞたまう」

というキリストの御姿です。それに我々もあずかって同じような役目をさせていただく。

３節「主の死によりて、救いはなりぬ。あまつつかいと、ともにぞうたわん」

と。本当に皆さん、キリストさまは全部してくださったんです。我々の側で何かやったんじゃない。キリストさまのほうで、それもキリストは、父の御意がキリストさまを動かして、御意を成就する。そのためにご自分を神さまに捧げ切って、委ね切って生きてくださいました。

本来ならば、十字架に懸かるようなお方ではありませんですよ。祈っておられたら眩(まばゆ)い姿になって直ちに天界に昇るお方が、あの残酷な十字架をお受けくださった。そこに、本来なら我々が受けとるべき運命を全部、主は我々に代わって担ってくださった。そうでしょ。イエス・キリストという方のお姿を見ていたら、十字架に懸かる必要性、理由なんて全くないですよ。そのお方が、こともあろうにあのような残酷な十字架をお受けくださって、十字架上で死を味わってくださった。今まで父なる神さまと本当に不可分一体、切っても切れない一つだったお方が、引き裂かれて地獄にまで突き落とされた、

「わが神、わが神、何ぞ我を捨て給いし」

と叫ばしめた、そのような叫びと共に地獄にまで蹴落とされて、そこで、地獄で苦しんでいる者たちを救いあげ、三日目に栄光の姿で現れてくださった。これがご復活という事態です。

ヨハネ伝にラザロが復活した、甦ったお話があります。墓に葬られて四日も経っている、そのラザロがイエス・キリストの呼びかけによって甦ってきた場面があります（ヨハネ11・38～44）。あれも大変なことですよ、墓に葬られて四日も経っている人間がもう一度同じ姿に返って来るなんて、普通考えられない。おそらく普通の人は信じないでしょうね。でも、私は、あれはあの通りだったと思っているんです。

ただ、私が強調したいのは、ラザロは確かに墓に葬られて四日も経って、それが元の姿に戻るなんて、それは奇跡と言うほかないけれども、しかし、その甦ったラザロは元のラザロなんですよ。元の姿に過ぎない。永遠の生命じゃないんです。

私たちは、肉体は朽ち果てます。しかし、朽ち果てた肉体の奥に、朽ちない本当の永遠

の生命をいただいたもう一人の私、もう一人のあなた、それが用意されている。だから、ラザロとは違うんですよ、我々は。それはラザロだってすごいと思いますよ。墓に葬られて四日も経った人間がもう一度同じ姿で現れて来るなんて、そんなことは普通考えられないですよ。しかし、私が強調したいのは、甦ったラザロは元のラザロです。永遠の生命をいただいているラザロじゃないんです。

●信仰とはプレゼント

私たちは、肉体は滅びます。けれども、肉体が滅びた後に忽然と現れて来る私たちは、霊体を頂いて、キリストの生命を頂いて、永遠界で生き続ける、そういう新しい生命を生きるんです。それは我々の側に拠り所は全くない。それは神・キリストの側でご用意くださったプレゼントなんです。それを私はありがたくお受けしています。皆さん、いかがですか？しっかりお受けになっていらっしゃいますか？　地上の生命が終わった後に、もう一つ別次元の世界で生きる新しい生命をしっかりいただいて、その生命に生きるんだと、そのことを皆さん、しっかりとお受けとりいただいているでしょうか？

信仰というのは、皆さん、何か難しいことのようにお考えになったら、これは間違いです。プレゼントを頂くだけなんです。プレゼントなんです。こちらに何か立派だからとか、信仰が厚いからとか、こちらの側には何の根拠もない。もっぱら、神・キリストの側で、

「これを受けとれ。いや、受けとってほしい。受けとってくれる人間がいないんだよ」

と。そのくらいに、多分、神さまの側では残念がっておられると思うんです。それに対して、

「はい、ありがとうございます」

と、幼子（おさなご）の心を持って受けとりなさい。「はい、ありがとうございます」と。そうでしょ。何か自分の側に理由があって、永遠の生命だとか、天国だとかを、受けとれるんじゃありません。そういう自信のある方もいらっしゃるかもわからない。

「自分は良いことばかりやってきた。自分は御意にかなうことばかりやってきた。だから自分は当然、天国を受け継ぐ、そういう資格がある」

と、まぁそれは結構な話でしょうけれども、私なんか全然そんなことは思わない。

「ありがとうございます」

と。「サンキュー」と言ったら全然意味がわからないが、「ありがたい」といったら、「有ることが難しい」ということでしょ。そんなことは普通あり得ないことが現に有る、有ることが難しいことが現に有るから「有り難うございます」でしょ。

「ふさわしくない人間に下さっている宝物、それをありがたくお受けいたします」

と、そういうイメージです。復活節を、

「昔のキリストがこのように甦られた、ああだった、こうだった」

と、そういう昔を偲ぶのも悪くはないでしょうけれども、大事なことは、このプリントで

いいますと、要旨のⅢの、

「我らの中に今も生きて在り給う御霊のキリスト」

このお方をしっかり受けとって、このお方と共に生きて行く、これが最も大事なことだと私は思っております。

●私たちの使命と喜び

皆さんにお配りしたこのプリントの一番下の段です。

《冒頭に掲げた聖句、すなわち、

「25……**我は復活(よみがえり)なり、生命(いのち)なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。26凡(およ)そ生きて我を信ずる者は、永遠(とこしえ)に死なざるべし。汝これを信ずるか**」（ヨハネ11・25～26）

の聖句のとおり、私たちに「永遠の生命」を賜り、肉体の生命を超えた「霊的生命」すなわち永遠の生命に生きる者としてくださった「この恵みの事態」を全存在的に信受・体受してそれを実証し、かつ、人々に分かち与える存在として用いていただくこと、ここに私たちの使命と喜びがあることを確信して、感謝と讃美の日々を過ごしたく願います。》

と。これが私の気持ちです。皆さんいかがですか？　私は、皆さんも同じであってほしいと願っています。

繰り返し申しますが、私たちの側に理由があるんじゃない。これは神・キリストの側で願ってくださっている事態なんです。神・キリストの側で、

「かくあってほしい」

と願っておられるのを、

「はい、ありがとうございます」

とお受けする、それだけなんです。そのことを私は皆さまに訴え、お願いしたいと思っている。

「永遠の生命を賜い、肉体の生命を超えた霊的生命、永遠の生命に生きる者としてくださった、この恵みの事態を全存在的に信じ体受して、それを実証し、かつそれを人々に分かち与える存在として用いていただくこと。ここに私たちの使命と喜びがある。そのことを確信して感謝と讃美の日々を過ごしたい。」

これが私の願いですし、皆さんもご同様であっていただきたい。そのように私は願っています。

さらに、ここにコロサイ書の聖言を掲げました。

「1**あなたがたはキリストと一緒に甦らされたのだ。だから、上にあるもの、天にあるものを求めることが当然ではないか。キリストは、あのところに在**

って神さまの右に座していらっしゃるからである。2だから、あなたがたは、上にあるもの、天にあるものを思って、地にあるものに心をうばわれるのではないよ。3あなた方は、主と共にこの地上に対しては死んだ存在なのだ。あなた方は、死にたる者だ。その生命は、キリストと共に、神さまの中に隠されて在る。4私たちの生命であるキリストが現れてくださるとき、あなたがたは、そのお方と一緒に栄光のうちに現れるんだ。」（コロサイ３・１～４）

これが、私たちが頂いている霊的現実であります。これを、

「本当にありがとうございます！」

と全存在で受けとり、そして御名を讃えて生きる。我々の生きる生き方というのは、それ以外に無いのではありませんでしょうか。

そして、この生命を人々に分かち与えて行く。どうぞ皆さん、

「だれ一人にも生命を分かち与えないで参りました」

なんて、そんなことで天上に行くのは止めてくださいね。やはり、受けとっていただけるかどうかは別として、我々は、生きている以上は、この賜った永遠の生命、これを人々に分かち与えたい。人々に本当の生命を受けとってほしい。それが、神・キリストの願っていらっしゃることだし、その神・キリストの願いと祈りを一つにして、そして生きて行く。これが、証人（あかしびと）としての我々の役目ではないでしょうか。

それが受けとってもらえるかどうか、何人の人を天国にお導きできたか、それはわかりませんよ。けれども、私たちがこの地上で生きて行くということは、そのようにしてキリストの生命を分かち与える、そういう存在として地上に生かしていただいている。単に永遠の生命を頂くだけなら、頂いたらすぐにそのまま天上に迎えられたら良いのかもしれません。そのほうが楽だしね。けれども、私たちは地上でこの生命を頂いた。これは神・キリストの側からしか頂けない、そういう尊い宝を頂いた。その宝を自分たちは持ち腐れにするのではなくて、

「我等、土の器に宝を有（も）てり、これ、優（すぐ）れて大いなる能力（ちから）の我等より出でずして神より出づることの顕れんためなり」（コリント後４・７）

とパウロはコリント後書の４章で言っていますように。そのようにして私たちは今度は、

「自分たちは救われたから、これで万歳、ハレルヤだ」

じゃないんです。

「この頂いた生命を人々に分かち与えて行く大事な役目を我々は賜っている」

と、そのことをしっかり私は自覚していただきたいと思う。

●キリストの生命を分かち与えていく使命

私はかつて大学に勤めて、研究・教育の職に携わっておりました。そういう時に、40歳

になる時から集会を始めた。それまでは、集会のメンバーとして市川喜一先生の集会に属して、先生の言うなれば片腕として集会を担う役目を果たして来たつもりですけども、40歳になる時に導きを受けて、

「一人で立ちなさい。そして、あなたがあなたらしく御言(みことば)を人々に伝え、人々にキリストの生命を分かち与える存在として歩みなさい。」

そういう、いわば天よりの召しを自覚して――もちろん小池辰雄先生のアドバイスがあったからですけれども――それを素直に「はい」とお受けして、今までお世話になった集会から離れて独立して、妻と二人で新しい歩みに入った。これが私が39歳の時でした。１９７２年１月１日からです。私は１９３２年生まれですから〔1932/9/28生〕、１９７２年はちょうど40歳を迎える年です。その時から新しい歩みを妻と二人で始めました。

そして２年後に「京都キリスト召団」という名前を頂きまして、さかのぼって１９７２年から「京都キリスト召団」という祈りの群れがスタートしました。それから50年です。この50年間、私にとっては決して楽な道ではありませんでした。と言いますのは、一方では教職という、法学部で民法の講座の担当者として、民法の教育・研究に携わるという非常に重い仕事を担いながら、同時にキリストを伝えて行く伝道という使命を頂く――いわば今流行の「二刀流」です――それを40歳になる年からその道に導かれて、そして50年です。はっきり言って、決して楽な道ではありませんでした。

けれども、それを支えてくれたのは妻の幸子(ゆきこ)でありましたし、それを担ってくださったのは主キリストさまであり、また、私を導いてくださった小池辰雄先生の導きでもありました。私はそうやって40歳になるときから50年間、それを貫いて参りました。本当にありがたいことだと思っています。それを、京都キリスト召団の皆さんが支えて来てくださいました。すべては感謝です。そして、現在の私というものがここに存在しています。

教職は、定年というものがありますが、キリストを伝えるというこのお仕事には、定年はないようです。それが終わるのは、天に迎え入れられるその時のようです。私は90歳になりましたけれども、あと何年間このキリストの証(あかし)の道を歩んで行くのか、私にはわかりません。他の仕事はすべて定年があって、引退、勇退ということですけれども、この、キリストを証(あかし)するこの道、集会の皆さまと一緒に歩んで行くこの道は、定年が無さそうですので、地上の生命の続く限り、この道を歩んで行きたいと、そんなふうに思っています。

そのことが今日皆さまにお配りしたプリントの終わりのところに書いた事柄であります。

《私たちに永遠の生命を賜い、肉体の生命を超えた霊的生命（永遠の生命）に生きる者として下さった、この恵みの事態を全存在的に信受・体受して、それを実証し、かつ、人々に分かち与える存在として用いていただくこと、ここに私たちの使命と喜びがあることを確信して、感謝と讃美の日々を過ごしたく願います。》

これは皆さまもご同様じゃありませんか。何も私のように皆さまの前でお話をする人間だ

けがキリストの恵みを分かち与える存在ではない。皆さまお一人お一人がすべてご生涯を通して、

「私はこのようにして生命の世界に導かれました。神・キリストの恵みにあずかることができました。私を今生かしてくださっているのは、ひとえに主イエス・キリストの、また、キリストを賜った父なる神さまの、恵みの御業に他なりません。どうぞ、このお方を受けとってください。どうぞ、私を通して、キリストを信じて、あなたも本当のキリストの器、あるいは、キリストを生きる人間になってください。」

と。そういうふうにして、人々に皆さまの内に在るキリストの生命を分かち与えていくという使命、これは皆さんお一人お一人が頂いていらっしゃる使命ですよ。私のように、人々の前で話す人間だけがその使命を担っているのではありません。皆さんお一人お一人がそれを頂いておられる。それをやらなければ、腐っていきますよ、本当に。

向こうに入るときに、

「あなたは何人の人にキリストの生命を分かち与えましたか？」

「いえ実は、私はだれもありません」

そんな恥ずかしいことでは困りますよ。

「いや、一生懸命にやったけれど、誰も聞いてくれませんでした」

これなら、まぁいいですわ。けれども、

「そんなことは畏れ多くてできませんでした」

それは宝物を地中に隠していた人がいましたね。ご主人がどこかに旅立つときに、それぞれタラントを預けて、

「これでしっかりやれよ」

なんて言われて、それぞれに頂いた方はそれを用いて稼いだけれども、一人だけ

「地面に隠しておきました」

なんていう話がありました。そういうことは駄目ですよね。

キリストの生命を人々に分かち与える。これがキリストに救われた皆さまお一人お一人の賜っている使命だと、私は思っております。そして、本当に御名を讃える。そういうふうに在りたいと思います。

そのことが今日のプリントの一番終わりのところです。

「私たちに永遠の生命を賜い、肉体の生命を超えた霊的生命（永遠の生命）に生きる者として下さった、この恵みの事態を全存在的に信受・体受して、それを実証し、かつ、人々に分かち与える存在として用いていただくこと、ここに私たちの使命と喜びがあることを確信して、感謝と讃美の日々を過ごしたい。」

皆様もご同様に、本当に心から願っていてくださることを私は望みます。

●私たちの国籍は天にある

ピリピ書の中に、

「人々に願いを起こさせ、それを成就してくださるのはキリストさまである」

という箇所があります。無理やりに神・キリストの側で何かを押し付けることはなさいません。私たちが心からそれを願うことを待ってくださっている。そのように思うんです。

このピリピ書のところは素晴らしいところだから、第2章を読んでいきましょう。

「1この故に、若しキリストによる勧、愛による慰安、御霊の交際、また憐憫と慈悲とあらば、

ここに「若し」なんてありますが、そうではなくて、

キリストによる勧め、愛による慰め、御霊の交わり、憐みと慈悲とがあるんだから、2あなた方は思いを同じくし、愛を同じくし、心を合わせ、思うことを一つにして、私パウロの喜びを充たしてほしい。3どんなことでも、徒党とか虚栄のためではなくて、おのおの謙遜をもって、互いに人を自分より優れたものとしなさい。4自分のことばかり顧みるのではなくて、人のことを顧みなさい。5あなた方はキリスト・イエスの心を心とせよ。

と。「キリスト・イエスの心を心としなさい」ということは、

6このキリスト・イエスは神さまの御姿であられたけれども、そういう、神さまと同じ御姿であることを固執しないで、7しもべの姿をとって、人として世に降ってくださった。8すでに人の様にて現れ、おのれを卑くして、死に至るまで、十字架の死に至るまで、従順に御意に従ってくださった。9だからこそ、神さまはこのイエス・キリストをご復活なさった。……12だから、愛する者たちよ、あなたがたは常に、服っていたように、私が居るときだけではなくて、私が居ないときでもますます服い、畏れおののいてご自分の救いを全きものとしてください。

と。その次です。

13神は、御意をなさんがためにあなた方の衷に働き、あなたがたをして志望を立てさせ、業を行わしめ給えばなり。

自分だけが「かくありたい、こうしたい」と自分が願っているようだけれども、実は神さまの側で、そういう願いを与えてくださった。だから、自信を持ってそれを貫きなさい。こう言って励ましてくれている。

14だから、呟かず、疑わず、すべてのことを行いなさい。

と。この「呟かず、疑わず」これ大事ですよ。

15あなた方は、生命の言葉を保って、世の光として、この時代に輝いて行くのだから。」（ピリピ2・1～15）

と。ついでに、ピリピ書を開いて頂いているので、３章のところにも入って行きたいと思います。パウロが願っているのは、とにかくキリストを頂くことです。

「9**ただキリストを信じる信仰の義、すなわち信仰に基づいて神さまより賜わるこの義を保ち**

「義」というのは、神さまに受け入れて頂けるという、その資格のことです。それを「義」と言っていますが、

神さまから賜るそういう義を頂いて、ずっとキリストの中に生かされて在る。
10**そして、ご復活の力を本当に味わい、キリストの死にならってキリストの苦難(くるしみ)にあずかり、**11**キリストがご復活されたように、自分も同じように、あの復活の生命を頂いて生きる、そういう在り方を自分は願っている。**12**すでに獲得したとは言っていない。そうではなくて、キリストに捕まえられて、それを追い求めている。**13**兄弟よ、すでに捉(とら)えたりと思わず、ただこの一事を務めている。すなわち、後ろのものを忘れ、前のものに向かって励み、**14**標準(めあて)を指して進み、神さまがキリスト・イエスによって天に迎えてくださる、そういう召し。そして、ご褒美を得ようとして、私は追求して止まないのだ。**

そして、少し飛ばしまして、

18**いまなおキリストの十字架に敵対して歩んでいる者は多い。そのために、本当に私は涙せざるを得ない。……**20**しかし、私たちの国籍は天にある。**

ここは大事です。私たちの国籍は天にある。我々は天国人である。

私たちは、主イエス・キリストさまが救い主としてそこから来てくださる

キリストのご再臨です、

そのことを待っている。21**このお方は、万物をご自身に従わせる力によって、私たちのこの卑(いや)しき状(さま)の体(からだ)、**

肉体、これはもう滅びますから、

それを変貌させて、ご自身の栄光の体と同じ姿に変貌させてくださる。このことを私は待っている。」（ピリピ３・９～21）

という。素晴らしいですね。まさにこの復活節を迎えるにふさわしい内容だと思います。プリントの先ほどのところです。

「私たちに永遠の生命を賜い、肉体の生命を超えた霊的な生命に生きる者としてくださったこの恵みの事態を全存在的に信受・体受して、それを実証し、かつ、人々に分かち与える存在として用いていただくこと、ここに私たちの使命と喜びがある。」

このことが、このプリントでいうⅢの

「私たちのなかに今も生きて在り給う御霊のキリスト」

この方を生きていくという事態であります。そして、感謝と讃美の日々を過ごしたいと。このコロサイ書です。

「1あなた方は、キリストと一緒に甦らされた以上は、上にあるものを求めなさい。キリストはあそこにいらっしゃって、神の右に座していらっしゃるからである。2あなた方は、天にあるもの、上にあるものを思って、地にあるものに心を惹かれないように。3あなた方は、地上ではすでに死んだ者だ。あなた方の生命は、キリストとともに、神さまの中に隠されて在るんだよ。4私たちの生命であるキリストが現れてくださるとき、あなた方も、そのお方と共に、栄光のうちに現れるんだ」（コロサイ３・１～４）

これが、

「私たちの内に今も生きて在り給う御霊のキリストを生きる」

という、そういう事態だと、私は受けとっております。

●ゲッセマネの祈り

それでは、順序が前後いたしますが、このプリントの要旨「Ⅰ受難日の出来事」です。ひとつは、「ゲッセマネの祈り」マタイ伝26章36節をお開きください。

「36ここに、イエス、彼らと共にゲッセマネという処にいたりて、弟子たちに言い給う『わが彼処にゆきて祈る間、なんじら此処に坐せよ』37かくてペテロとゼベダイの子二人を伴いゆき、憂い悲しみ出でて言い給う、38『わが心いたく憂いて死ぬばかりなり。汝ら此処に止りて我と共に目を覚しおれ』39少し進みゆきて、平伏し祈りて言い給う『わが父よ、もし得べくば此の酒杯を我より過ぎ去らせ給え。

十字架という酒杯です。

されど我が意の侭にとにはあらず、御意のままに為し給え』40弟子たちの許にきたり、その眠れるを見て

弟子も一緒に祈ってほしいと、イエスは言っておられるのに、彼らは眠っていた。

ペテロに言い給う『汝ら斯く一時も我と共に目を覚まし居ること能わぬか。41誘惑に陥らぬよう、目を覚まし、かつ祈れ。げに心は熱すれども肉体よわきなり』42また二度ゆき祈りて言い給う『わが父よ、この酒杯もし我飲までは過ぎ去りがたくば、御意のままに成し給え』

御意ならば私はそれに従いますと。

43復きたりて彼らの眠れるを見たもう、是その目疲れたるなり。44また離れゆきて、三たび同じ言にて祈り給う。45而して弟子たちの許に来りて言い給う『今は眠りて休め。視よ、時近づけり、人の子は罪人らの手に付さるるなり。

46起きよ、我ら往くべし。視よ、我を売る者近づけり』」（マタイ26・36～46）

ユダがやってきたという場面です。

●十字架上での祈り

次は、「十字架上での祈り」マタイ伝の27章45節から。38節あたりからご覧下さい。

「38ここにイエスとともに二人の強盗、十字架につけられ、一人はその右に、一人はその左におかる。39往来の者どもイエスを譏り、首を振りていう、40『宮を毀ちて三日のうちに建つる者よ、もし神の子ならば己を救え、十字架より下りよ』41祭司長らもまた同じく、学者・長老らとともに嘲弄して言う42『人を救いて己を救うこと能わず。彼はイスラエルの王なり、いま十字架より下りよかし、さらば我ら彼を信ぜん。43彼は神に依り頼めり、神、彼を愛しまば、今すくい給うべし、「我は神の子なり」と云えり』44ともに十字架につけられたる強盗どもも、同じ事をもてイエスを罵れり。」（マタイ27・38～44）

ここに、

「ともに十字架につけられた強盗どもも、同じ事をもてイエスを罵れり」

とありますけれど、これは、ルカ伝ではちょっと違います。ルカ伝の23章32節から見て行きましょう。

「32また他に二人の悪人をも、死罪に行わんとてイエスと共に曳きゆく。33髑髏という処に到りて、イエスを十字架につけ、また悪人の一人をその右、一人をその左に十字架につく。34かくて、イエス言いたもう『父よ、彼らを赦し給え、その為す所を知らざればなり』彼らイエスの衣を分かちて籤取にせり、35民は立ちて見いたり。司たちも嘲りて言う『かれは他人を救えり、もし神の選び給いしキリストならば、己をも救えかし』36兵卒どもも嘲弄しつつ、近寄りて酸き葡萄酒を差し出して言う37『なんじ若しユダヤ人の王ならば、己を救え』38又イエスの上には『これはユダヤ人の王なり』との罪標あり。

さんざん彼らはイエスを罵って嘲っています。

39十字架に懸けられたる悪人の一人、イエスを譏りて言う『なんじはキリストならずや、己と我らとを救え』

それに対して、もう一人のほう、

40他の者、これに答え禁めて言う『なんじ同じく罪に定められながら、神を畏れぬか。41我らは為ししことの報を受くるなれば当然なり。されど此の人は何の不善をも為さざりき』

十字架にイエスはつけられ、その左と右にそれぞれ悪人が十字架につけられている。大変な犯罪を犯した人が居たわけです。片方はイエスをさんざん罵った。それに対してもう一人は違いました。

『なんじ同じく罪に定められながら、神を畏れぬか。41我らは為ししことの報を受くるなれば当然なり。されど此の人は何の不善をも為さざりき』

42また言う『イエスよ、御国に入り給うとき、我を憶えたまえ』43イエス言い給う『われ誠に汝に告ぐ、今日なんじは我と偕にパラダイスに在るべし』

この十字架の片方の盗賊は最後の瞬間にこのイエスによって救われて、そして天国に入れていただいたわけですね。

「イエスよ、御国に入り給うとき、私を憶えてください。こんな私のような奴が、どういう巡り合わせか知らないけれども、あなたの側に居たということ、本当にこのことをありがたく思います。どうぞ、御国に入られるときに、こんな奴が居たということを憶えていてください。」

そう涙ながらに訴えた。それに対してイエスは直ちに、

「今日、汝は、我と偕にパラダイスに在るべし」

これが、キリストの無限無量の赦しの御愛です。それから最後の場面です。

44昼の十二時ごろ、日、光を失い、地の上あまねく暗くなりて、三時に及び、45聖所の幕、真中より裂けたり。46イエス大声に呼わりて言いたもう『父よ、我が霊を御手にゆだぬ』斯く言いて息絶えたもう。47百卒長この有りし事を見て、神を崇めて言う『実にこの人は義人なりき』（ルカ23・23～47）

こういう場面があります。

●甦り給いし主キリスト

今度は、「甦り給いし主キリスト」。そこをやはりマタイ伝の27章から見ておきましょう。27章の45節。

「45昼の十二時より地の上あまねく暗くなりて、三時に及ぶ。46三時ごろイエス大声にて叫びて『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』と言い給う。わが神、わが神、何ぞ我を見棄て給いしとの意なり。

それから50節、

50イエス再び大声に呼わりて息絶えたもう。51視よ、聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなり、また、地震い、岩割け、……」（マタイ27・45～51）

何か大変なことが起こったということがここに書かれています。そしてマタイ伝28章。

「1さて安息日おわりて、一週の初めの日のほの明き頃、マグダラのマリヤと他のマリヤと墓を見んとて来りしに、2視よ、大いなる地震あり、これ、主

の使、天より降り来りて、かの石を転し退け、その上に坐したるなり。
3その状は電光のごとく輝き、その衣は雪の如く白し。4守の者ども彼を懼
れたれば、戦きて死人の如くなりぬ。5御使こたえて女たちに言う『なんじ
ら懼るな、我なんじらが十字架につけられ給いしイエスを尋ぬるを知る。

あなたがたは十字架につけられたイエスを尋ねて来たのでしょ。ここには居ません。言い給いし如く、既に甦り給うた。墓の中を見てごらん。そしたら早く弟子たちに、イエスは甦られたということを伝えよ、というようなことを言います。

「7……彼は死人の中より甦り給えり、視よ、汝らに先立ちてガリラヤに往き
給う、彼処にて謁ゆることを得ん」と告げよ。視よ、汝らに之を告げたり』
8女たち懼れと大いなる歓喜とをもちて、速やかに墓を去り、弟子たちに知
らせんとて走りゆく、9視よ、イエス、彼らに遇いて『安かれ』と言い給い
たれば、進みゆき、御足を抱きて拝す。10ここにイエス言いたもう『懼るな、
往きて我が兄弟たちに、ガリラヤにゆき、彼処にて我を見るべきことを知ら
せよ』」（マタイ28・1～10）

そのようなことが、マタイ伝には記されています。それから、マルコ伝16章。

「1安息日終りし時、マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤ及びサロメ、往き
てイエスに抹らんとて香料を買い、2一週の首の日、日の出でたる頃いと早
く墓にゆく。3誰か我らのために墓の入口より石を転ばすべきと語り合いし
に

重い石で墓が塞がれているはずだから、それを除けなければ、イエスの御体に香油を塗ることができないということで、どうしようかと。ところが、目を上げてみたら、石はもうすでに転がしてある。

4……この石は甚だ大いなりき。5墓に入り、右の方に白き衣を着たる若者の
坐するを見て甚く驚く。6若者いう『おどろくな、汝らは、十字架につけら
れ給いしナザレのイエスを尋ぬれど、既に甦りて、ここに在さず。視よ、
納めし処は此処なり。7されど往きて弟子たちとペテロとに告げよ「汝らに
先立ちてガリラヤに往き給う、彼処にて謁ゆるを得ん、かつて汝らに言い給
いしが如し」』8女たち甚く驚きおののき、墓より逃げ出でしが、懼れたれば
一言をも人に語らざりき。」（マルコ16・1～8）

それから、ルカ伝の24章。

「1一週の初めの日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく。2然
るに石の既に墓より転ばし除けあるを見、3内に入りたるに、主イエスの屍体
を見ず。4これが為に狼狽えおりしに、視よ、輝ける衣を着たる二人の人そ
の傍らに立てり。5女たち懼れて面を地に伏せたれば、その二人の者いう『何

ぞ死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか、6彼は此処に在さず、甦り給えり。尚ガリラヤに居給えるとき、如何に語り給いしかを憶い出でよ。7即ち「人の子は必ず罪ある人の手に付され、十字架につけられ、かつ三日目に甦るべし」と言い給えり』8ここに彼らその御言を憶い出で、9墓より帰りて、凡てこれらのことを十一弟子及び凡て他の弟子たちに告ぐ。10この女たちは、マグダラのマリヤ、ヨハンナ及びヤコブの母マリヤなり、而して彼らと共に在りし他の女たちも、之を使徒たちに告げたり。11使徒たちはその言を妄語と思いて信ぜず。……

13視よ、この日二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔たりたるエマオという村に往きつつ、14凡て有りし事どもを互いに語りあう。15語りかつ論じ合う程に、イエス自ら近づきて共に往き給う。

旅人の姿でイエスが同行された。

16されど彼らの目遮えられて、イエスたるを認むること能わず。17イエス、彼らに言い給う『あなたがたが歩みながら語り合っていることは、いったいどういうことなのだ』彼ら悲しげなる状にて立ち止まり、18その一人なるクレオパと名づくるもの答えて言う『あなたはエルサレムに宿っていらっしゃりながら、大変なことが起こっているのをご存じないのですか』19イエス言い給う『如何なる事ぞ』答えて言う『ナザレのイエスの事なり、このお方は神と凡ての民の前にて業にも言にも能力ある素晴らしい預言者でいらっしゃったのに、20祭司長ら、それから司たちは、これを十字架につけて殺してしまった。21我らは、イスラエルを贖うのはこの方なりと望みを託していたのに、それが成らなかった。そして、きょうはもう三日目。22ところが、私たちの中の女たちが、私たちを驚かせたことには、墓に行ってみたら、23屍体が無かったという。しかも、御使たちが現れてイエスは生きていらっしゃると告げた、などと言う。24仲間もまた墓に行ってみたら、まさにその通りでした。イエスを見なかった』25そこで、旅人の姿のイエスはおっしゃった。『ああ愚かにして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍き者よ。キリストは必ず此らの苦難を受けて、其の栄光に入るべきならずや』27かくてモーセ及びすべての預言者をはじめ、ご自分について聖書に録されたる凡てのところを解き明かして、お示しくださった。28遂に往くところの村、エマオに近づきしに、イエスなお進み行く様なれば、29強いて止めて言う『もう夕方になっていますから、ここで留まりましょう』30そして、食事の席に着いたとき、その旅人は、パンを取り、それを祝福し、そして、弟子たちに与えられた。

そのお姿が、まさにかつての主キリストのお姿と同じだったので、ハッと気が付いた。

31あ、イエスだ。ところが、気が付いた時には、もうイエスは、お姿はなかった。32彼らは互いに言った『途にて我らと語り、我らに聖書を説き明し給えるとき、我らの心、内に燃えしならずや』33そこで、ただちにエルサレムに引き返した。……36そしたら、そこにイエスがいらっしゃった。またイエスはご自分を、お姿をお示しになった。かくて、手と足を示してくださった。……41かれら歓喜の余りに信ぜずして怪しめる時、イエス言い給う『此処に何か食物あるか』そこで食物をお取りになった。

大事なことは、次のことです。

『44……これらのことは、なお私があなた方と一緒に居た時に既に語ったことだ。モーゼの律法、預言者、それから詩篇、それらに記された私に関する預言はことごとく成就した』。45ここに聖書を悟らしめんとて、彼らの心を開きて言い給う46『次のように録されている。キリストは苦難を受けて、三日目に死人の中より甦えり、47且その名によりて罪の赦しを得さする悔改めは、エルサレムから始まって、万国の人々に宣べ伝えられるべきである。48あなた方はこれらのことの証人である。49視よ、私は父が約束してくださったものの御霊ですね。

それをあなた方に贈る。あなた方は上から能力を着せられるまでは都に留まっていなさい。』」（ルカ24・1～49）

そういうことですね。これがルカ伝24章のお話でした。

最後にヨハネ伝20章を開いて頂きたいと思います。20章の初めから見ましょう。

「1一週のはじめの日、朝まだき暗きうちに、マグダラのマリヤ墓にきたりて、墓より石が取除けてあるのを見た。2すぐ弟子たちのところに行って『たれか主を墓より取去れり、何処に置きしか我ら知らず』

イエスはいらっしゃらないと。ペテロとヨハネとがまた墓に行ってみたら、やはり同じように墓の中は空っぽだったというわけです。

6シモン・ペテロ後れ来り、墓に入りて、布を置いてあったところを視、7また首を包んでいた手ぬぐいは布とともになく、他のところに巻いてあるのを見た。イエスはいらっしゃらない。……9彼らは聖書に録した『死人の中より甦り給う』ということになっているということを、まだ悟っていなかった。10遂に二人の弟子は各々自分の家に帰って行った。

ところが、マリヤはそう簡単に墓を去るわけにいかなかった。

11マリヤ、墓の外に立ちて泣き居りしが、泣きつつ屈みて墓の内を見るに、12イエスの屍体の置かれし処に、白き衣を着たる二人の御使、首の方に一人、

足の方に一人坐しいたり。13而してマリヤに言う『おんなよ、何ぞ泣くか』マリヤ言う『誰かわが主を取去れり、何処(いずこ)に置きしか我知らず』14かく言いて後に振り反れば、イエスの立ち居給うを見る、されどイエスということは分からなかった。15イエス言い給う『おんなよ何ぞ泣く、誰を尋ぬるか』マリヤは、園守り、墓番をやっている者だと思って『あなたがもしこのお方を取り去ったのなら、何処に置いてくださったのか知らせてください。私がお引き取りしたいのです』。16イエス『マリヤよ』と言い給う。マリヤ、振り反りて『ラボニ（先生）』と言う。17イエス言い給う『私に触(さわ)るんじゃない、これから父の御許に昇って行かねばならない。だから、兄弟たちに告げてほしい『我はわが父すなわち汝らの父、わが神すなわち汝らの神のところへ昇って行くのだ』。18マグダラのマリヤは往きて弟子たちに『われは主を見たり』と告げ、また云々(しかじか)のことを言い給いしことを告げたり。」（ヨハネ20・1～18）

という。この、

「マリヤよ！」

「ラボニ！（先生！）」

この場面が、とても素晴らしいですね。

「19……一週のはじめの日の夕(ゆうべ)、弟子たちユダヤ人を懼(おそ)るるに因(よ)りて、居るところの戸を閉じおきしに、イエスきたり彼らの中に立ちて言いたもう『平安なんじらに在れ』（シャーローム）、20斯く言いてその手と脇とを見せたもう、弟子たち、主を見て喜べり。21イエスまた言いたもう『平安なんじらに在れ、父の我を遣(つかわ)し給えるごとく、我も亦なんじらを遣す』。22斯く言いて、息を吹きかけ言い給う『聖霊をうけよ。23なんじら、誰の罪を赦すとも其の罪ゆるされ、誰の罪を留むるとも其の罪とどめらるべし』。

それからあと、トマスの話が出てきます。これもちょっと見ておきましょう。

24イエス来(きた)り給いしとき、十二弟子の一人デドモと称うるトマスは、そこに居なかった。25他の弟子たちがトマスに対し『自分たちは主を見たんだよ』と。それに対してトマスは、『とてもそのようなことは信じられない。その御手に釘の痕(あと)を見、指を釘の痕にさし入れ、自分の手を主の脇にさし入れて、しっかり確かめなければ、自分はとてもそんなことは、主がご復活になったなんてことは信じられない』と言って拒んだ。

26ところが、八日の後、同じように戸を閉じていたときに、イエスが再び来てくださった。27トマスに対して『あなたのご希望どおり手を伸べて私の手を見てごらん。また、私の脇腹にさし入れてごらん。信ぜぬ者とならないで、信ずる者となりなさい』。28トマス答えて言う『我が主よ、我が神よ』。29イエ

ス言い給う『なんじ、我を見しによりて信じたり、見ずして信ずる者は幸福(さいわい)なり』（ヨハネ20・19～29）

ここも素晴らしいところです。トマスは、はじめ疑っていて、弟子たちがイエスに出会ったと言っても信じなった。しかも、弟子たちに対し、

「あなた方は簡単に、主が復活されたなんて信じているけど、私はとてもじゃないがそのようなことは信じられない。自分でこの指を脇腹にさし入れ、釘跡に実際に触ってみなければ、とてもそのようなことは簡単に信じられない。」

と。非常に正直です。ところが、イエスが一週間後にそのトマスに現れてくださった。

「さあ、ご希望どおり、あなたの手を脇腹にさし入れてごらん」

もうそこでトマスはすっかり参って、

「我が主よ、我が神よ」

と。そこでイエスは、

「あなたは見たから信じたのか。見ないで信じる者はさいわいだよ」

これはとても大事なことですね。

「見ないで信じるものが大事だ、さいわいだよ」

とおっしゃった。それがこのプリントで言いますと、ヨハネ伝20章のところです。

●むすび　奨励のことば

そして、最後のところです。私たちは、過去の主イエスがどのようにして十字架に懸かられ、どのようにして甦られ、どのようにして弟子たちに現れて来られたか、それを福音書で確かめてきました。そのことも大事ですけれども、最も大事なことは聖句に掲げましたように、

「25我は復活(よみがえり)なり、生命(いのち)なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。26凡そ生きて我を信ずる者は、永遠(とこしえ)に死なざるべし。汝、これを信ずるか」（ヨハネ11・25～26）

このように今も私たちに呼びかけてくださっている、そのお方をしっかり、

「はい、主さま、あなたは生きておられます。あなたは、死んで葬られるような、そのようなお方ではありません。あなたはご自分の肉体において死を受けとって、死を克服して、あのご復活の永遠の生命、これを実証してくださいました。そして、あなたが永遠の生命をあのようにして実証してくださったのは、私たちに同じ永遠の生命を分かち与えてくださるため、そして、その永遠の生命を我々が頂いて、それを私たちが人々に分かち与えて行くため、そのような使命を与えてくださるために、あなたはあのような十字架を突破し、そして栄光の御姿で現れた。人々は復活と言っていますが、あれはあなたの本当の御姿が現れただけのことです。その同じ栄光の御姿に我々をあずからしめて、私たちを永遠の生命者として生か

し続けてくださる。そして『その生命を人々に分かち与えよ』と、そのような大事な使命をくださいました。私たちは、あなたと共に、これからも生き続けてまいります。主よ、御名を讃えます。」

そうやって私たちは、自分たちのこの肉体の生命を超えた本当の永遠の生命を生きる、そういった存在者として、主のしもべとして生かしていただく。そのことを私たちは使命としていただいた。そのことを感謝して生きて行く。それが最も大事なことであります。

そのことをこの終わりのところに掲げました。

「私たちに永遠の生命を賜い、肉体の生命を超えた霊的生命（永遠の生命）に生きる者として下さったこの恵みの事態を全存在的に信受・体受して、

この「信受」だけだったら、何か頭の中で、心の中だけで信じているようで頼りない。体(からだ)で受けとること。だから、信受・体受して、

それを実証し、そして、それを人々に分かち与える。そういう存在に私たちを作り変えてくださった。そういう使命をいただいた。この使命と喜び、これを我々は確信して、感謝と讃美の日を過ごして行く。」

これが、私たちがこの復活節を迎える本当の意味だと思っております。決して、

「昔、主はあのように甦ってくださった、ああ素晴らしかった」

という、そういう過去の追憶に浸(ひた)るのではなくて、

「今、現に生きて、私たちの中に働いてくださっている、今も生きて在り給うキリストさま」

という。私たちの外なる人は滅びて行きます。しかしながら、その奥に滅びない永遠の生命が隠されている。そして、私たちのこの肉体という外なる人が朽ち果てた時に、忽然として、内なる人が輝きをもって現れて来る。そして、その内なる人は輝きをもって天界に迎えられて行く。これは皆さんお一人お一人に主がくださった恵みなんです。我々の側に拠り所、理由がある訳じゃない。もっぱら主キリストさま、これが父なる神の御意に従って成し遂げてくださった恵みの御業なんです。だから、私たちは、

「主よ、ありがとうございます。私たちは本来死ぬべき存在でした。ところが、その死ぬべき私たちに、死んでも死なない永遠の生命をあなたは下さいました。私たちの背きの罪、それを全部、あなたは十字架で引き取ってくださいました」

と。そして、パウロと一緒に、

「我主と共に十字架につけられたり、最早、旧き我は生きていません。あのご復活の栄光の主が、聖霊となって私たちの内に宿り、私たちを生かし担い、そして共に生きてくださいます。主よ、御名を讃えます。私たちの外なる人、これは壊れても、内なる人は日ごとに新(あらた)であります。御名を讃えつつ歩みます。そして、このあなたの永遠の生命を人々に分かち与えるという素晴らしい尊い役目を下さっ

たことを感謝いたします。どうぞ、主よ、日々あなたと共に歩ませてください。

御名を讃えてまいります。」

と。このようにして私たちは、

「外なる人は壊(やぶ)るれども内なる人は日々に新(あらた)なり」（コリント後４・16）

これを霊的な現実として、リアリティとして歩んで行きたい。これが私の心からの願いですし、また、それは必ず成就させてくださる。皆さんもご同様であることを願っております。それでは、これをもって、本日の私の講筵を終わりたいと思います。アーメン。

●祈り

それでは、最後に一言お祈りいたします。

主さま、ご復活のあなたのご栄光の主の御姿を我々は拝することができました。

主さま、

「われ生くれば、汝らも生くべし」

と、あなたは仰って下さいました。あなたは死を突破し、栄光の御姿をもって顕れて下さった。あのご復活の御姿。どうぞ、その御姿に我々は荷なわれ、抱かれて、私たちも同じ永遠の生命を頂きました。「われ生くれば、汝らも生くべし」と、あなたは常に我々を生命づけ、力づけ、そしてこの肉体の命を超えた永遠の生命の世界、天国の事態を携えて、日々歩むように、御名を讃えて歩むようにと励ましていて下さることを感謝いたします。

主さま、ご復活を祝う復活節のこの日、生きて今も働いてあり給う御霊の主さまを我々は頂き、そして主と共にこれからも歩んで参ります。どうぞ、今日ここに集われたお一人お一人のうちにあなたが宿り、荷い、そして、「われ生くれば、汝らも生くべし」と、共に永遠に至るまで、御国にはいるまで、共に歩んで下さるように。そして、あなたを知らない人たちに、あなたの生命を分かち与えていくことができるように、どうぞ、御用い下さい。

今日のこの復活の記念の日を感謝し、尊い主イエス・キリストの御名を通して、この感謝と讃美と祈りを御前にお捧げいたします。